

## 障害のある子どもを包括する保育実践の方向を探る（８）

### － 障害児を受け入れる保育者集団の意識変化 －

○ 港北幼稚園 渡辺英則 玉川大学・香蘭幼稚園 若月芳浩

#### I. はじめに

園に障害児を受け入れるかどうかを判断する際、大きな要因となるのは、「障害児を受け入れてもいい」と思う保育者がその園にいるかどうかという保育者の意識である。

障害のある子を受け入れることは大変だという意識が職員に強ければ、当然障害のある子の受け入れは拒否される以外にない。まして、フリーの保育者も少なく、クラスみんなが同じように動くことをよしとする保育形態では、保育者自身に受け入れる気持ちがあっても、受け入れは不可能に近い。

また、保育者や親の中にも、障害のある子は専門機関である療育センター等で個別の指導を受けた方が好ましいと考える人が多い。

ところで、障害のある子にかかわっている園の保育者はどんな意識をもって保育に取り組んでいるのだろうか。また、個々の保育者の保育、保育者の意識、保育者同士の連携、親との連携等について、障害のある子がいることで、どのような影響を受けているのだろうか。自園の保育者の、障害児に対する意識を調べることで、障害のある子のごく当たり前にいる保育の意味について考えてみたい。

#### II. 調査の方法

障害のある子が園にいることの意味を、今回は自園の保育者すべてに、「障害児が園またはクラスにいることを、保育者としてどのように感じているか」自由に記述してもらい、そこから項目別に分けた。

回答した保育者は、クラスに障害のある子もいれば、クラスを持たずフリーの保育者もいる。ただし、どの保育者も日常的に障害のある子にかかわっており、障害のある子について話し合う機会は多くある。

幼稚園の概要 園児数 310名 12クラス  
職員数 24名(内4名は非常勤)

#### III. 保育者の自由記述より

##### ○違和感を感じない

障害児も健常児もみんなそれぞれ個性だと思うから、何の違和感も感じていない。障害児を特別視することなく、いろんな人がいることを子ども達も自

然に受け入れられているような気がする。

しかし、障害児に関しては、どうしても手がかかってしまう場合があり、保育者の援助を多く必要とする時がある。その子につきっきりではなく、必要に応じて、手助けをしてあげたいと思うし、困っている子がいる時にクラスみんなで助け合っていてくれるような雰囲気を作っていきたいと思う。

今は、障害のある子が保育者やフリーの先生、保護者、子ども同士等、いろいろな人と触れ合う機会がないほうが不自然に感じる。

自分が園児だった頃も統合保育だったので、自分にとっても今の現状は自然だし、当たり前だと思う。小さい時にそういう環境だったからこそ、今の考え方ができるのだと思う。

以前勤めていた園では、障害のある子はすべて断っていた。この園にきて、要害のある子とかかかわっている保育者の姿や子ども達を見たとき、ものすごくカルチャーショックのようなものを感じた。

##### ○障害のある子どもについて

うれしい、楽しい、嫌だ、やらない、と感情を素直に表現するので、人への遠慮とか、余計なことを考えることなしに、ありのままの姿なのかもなあと感じることがある。でも何かできたりすると、本当にうれしい。ただし、フリーの保育者がいるからできること。ひとりではとてもこう（障害あるの子がいても当たり前）は思えないと思う。

一歩、一歩歩んでいる彼らが、できるようになったこと、頑張っていることを認めた時の笑顔。とても pure で、人として一番大事な気持ちってこういうことなんだと改めて感じさせられる。

障害のある子は、課題がある分、克服していく過程や乗り越えられた時の感動、感激の大ききときたら何に表現できるものではない。何度、鳥肌が立ち、涙をうるませたことか。その姿、その瞬間はこの時にしか味わえないもので、本当にそこに立ち会えた

ことをうれしく思う瞬間だ。

だからこそ、その子を産んで、育てている両親、家族の方と、思いを共にして一喜一憂しながら、悩みも喜びも伝え合えたら最高だなあと感じる。

#### ○自分を問う

障害のある子を受け入れる園にいられることを幸せだと思う。またその子を知ろうとする保育者集団の中に、自分もいられることは、自分自身の大きな成長になっている。しかし、障害という言葉と、その子の個性の中で揺れ、病的な部分と個性との間で悩む。ただし、悩むからこそ、自分の枠を広げていけるのだと思うが……。

「(周囲の子に) 手が出てしまう」「行動が安定しない」といった難しさがでていた時は、先がみえない不安にかられたこともあったけれど、そんな時に「どんな思いがあるんだろう」と、障害のある子のペースでじっくり考えてみていったことは、いろいろなことに気づくきっかけとなりプラスになっている。

#### ○子ども同士が育つ

いろいろな子がいるからこそ学び合えると思う。よい面も悪い面も子どもはもっているが、担任も子ども達も、それをそのように感じて返していくかで、考えるきっかけが増え、相手のことを考えたり、思いやったりする心が持っていくのだと思っている。

障害のある子だけでなく、周りの子ども達も含めて自然なかかわりができること(どうしたらよいかわからなかったり迷ったりすることもありながら、その中で相手の気持ちがわかって喜び合ったりする)、やさしい気持ちを誰に対しても持っていられたらうれしいと思う。

守られた大人の集団ではなく、やさしく暖かい、でも時には残酷な子ども達の集団の大切さを感じる。

#### ○保育者同士の連携

障害のある子がいるということで、健常児の子を交えてクラス作りや、園の保育者同士もより一層話す機会や交流の場を設けられるような気がする。それにより、普段の子どもの様子などを基に、どのよ

うに保育者同士が連携をとっていくかなど、保育の原点を話し合えるのではないかと思う。

障害の子がいると、クラスだけで、担任だけでどうにかするというより、まずはありのままの姿でいられる場を認めようとする中で、担任もフリーも連携をとろうとするし、変にこだわらず、素直に手を借りる。そうすると、うれしさもみんなで感じ合え、結果として、子どもも保育者もより自分らしさを感じることができている。

#### ○フリーの立場から

フリーになって感じるのは、その子にどう付き合っていくかがすごく難しいということ。子どもの気持ちを感じつつ、クラスの様子に合わせつつ、担任の思いを感じつつ、保育に取り組む。自分1人じゃできないし、本当に気持ちを開いて、大人同士が話し合う連携がとても大事だ。だけどそれが難しい。

#### ○障害のある子の親に対して

親のつらさ、苦しさをどれだけ私たちが受けとめ、それをどのように親に伝えていくか、という保育者の役割の重要性を感じている。

多くの障害のある子の親とかかわる中で、その子達を育てる過程ではきれいごとだけでない状況があること、だからこそ、子どもの成長と一緒に喜んでくれる場や親を受け入れてくれるところがあることの意味は本当に大きいとわかった。

#### IV. 考察とまとめ

これまで、障害のある子をどのように受け入れ、保育するかという、障害児を中心とした保育の内容や方法に視点をあてた研究は多くなされてきた。しかし、障害のある子がいる保育に取り組むことで、その園の保育や、保育者の専門性や人間性、子ども達の変化、保育者間の連携等、園の保育そのものがどのような影響を受け、変化していくのかという、障害のある子がいることの積極的な意味について、深く研究されることはなかった。

保育者の記述からだけでも、障害のある子の保育を突き詰めていけばいくほど、困難さと裏腹に、保育そのものを変えていくことがみえてきた。障害のある子には、園の保育、保育者、子ども同士の関係など、周囲を変えていく力が内在しているのである。